サウンド／パフォーマンス／彫刻

アートの現場から ACAC通信

3月6日、アーティストユニット「正直」の小林椋さんと時里充さんを国際芸術センター青森（ACAC）に招いて、ライブパフォーマンスとワークショップを開催します。2016年「できるだけ正直に演奏する」をコンセプトに結成した正直は、モーターが養生テープを巻き取ることで生まれる緊張感のあるサウンドと、装置や素材の動きとの淡々として繊細なやり取りを行うパフォーマンスが高く評価されています。国内での精力的な活動はもとより、2019年メディア・アートの世界的なイベント「アルス・エレクトロニカ（オーストリア）」でHonorary Mentionsを受賞した新進気鋭のユニットです。

ライブパフォーマンスと聞くとどのようなものを想像するでしょうか？ ロックミュージックやジャズ、ヒップホップなど、音楽ジャンルを思い浮かべる方も多いかもしれません。音楽だとギターやピアノなどの楽器を使って演奏をしますが、正直が使用するのは「養生テープ」と「モーター」です。工事や塗装などの際に使用される養生テープは、美術の現場でも大活躍の名脇役的存在です。ご存じでない方も、お部屋にもしテープ類があれば、それを一度ご自身の肩幅くらいの長さまで一気に引っ張ってみてください。セロハンテープだと高い音でシュッと鋭い音が、ガムテープだとバリバリっと少し低めの音が鳴るかもしれません。材質や幅の違いで意外と異なる音が鳴ることが分かります。例えば、正直は中央の穴を椅子の足に通してテープを引っ張ってみたり、幅の違うテープで音程や質感の異なる音を出してみたり、身体の動かし方によって引っ張る速度や動かす距離を変えながら、様々な音を生み出していきます。

さらに特徴的なのは、造形のライブパフォーマンスでもあることです。モーターは、この点で大きな役割を担います。例えば、回り続けるモーターに複数のテープを順につけて巻き取らせてみたり、引き伸ばしたテープが重なり続けてもつれたままにしたり、あるいは先ほどの椅子はテープが全てモーターに巻き取られると音を立てて動いたりします。物の動きと彼らの動作で出来上がっていくテープの塊は、彫刻作品のようにも見えてきます。さらには脚立や台車など会場の備品にテープをひっかけるなどして、空間全体に広げていきます。

彼らは、決められた機能を超えた音の鳴らし方で、物が出す音を丁寧に聴きながら、動きの作用を試しながら正直に音を鳴らし続けます。ちなみに、このイベントのタイトルは「音の慣らしかた」。会場となる円弧形の大きな512平方㍍天井高6㍍のACACのギャラリーは、小さな物音でも大きく響く環境です。この特徴的な環境でのライブを本人たちも楽しみにしています。正直がどのように音を鳴らして／慣らしていくでしょうか。ぜひ会場でご覧ください。

ライブパフォーマンスとワークショップについては、ACAC（☎017－764－5200）へお問い合わせください。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　村上綾）

※第1金曜日掲載

「正直」の（左から）時里充、小林椋